

ジュール・ヴェルヌ

狩りの十時間

— ただの小咄 —

三 枝 大 修 訳

I

狩猟家のことを毛嫌いする人々もおりますが、たぶんそういった人々が完全にまちがっているというわけでもないのです。

この毛嫌いの理由は、紳士たる彼らが特に嫌がりもせず自分の手で獲物を殺し、さらにそれを食べてしまうからでしょうか？

むしろこの狩猟家という人々が、時宜を得るごとに、また時宜を得ていないときですら、あまりにも嬉々として自分の豪傑ぶりを物語るからではないでしょうか？

私の考えは、後者の理由の方に傾いております。

ところで、20年ほど前に、私はこの悪事のうちの一つ目について、罪ありということになってしまいました。狩りをした！¹⁾ そうです、狩りをしたのです！……というわけで、そんな自分を罰するために、これからその狩りの冒険について皆さんに仔細に物語り、それによって二つ目の悪

1) エクスクラメーションマークの多用はヴェルヌの文体的特徴の一つ。邦訳では過剰と判断されて句点に置き換えられることも多いが、本稿ではすべて原文のままにしておく。

事についても有罪となることにいたしましょう。

願わくば、真摯かつ真正なものであるこのお話のせいで、わが同胞たちが、獲物袋を背負い、ベルトに弾薬入れを付け、猟銃を小脇に抱え、犬のあとを追って野に出ていく——そんな意欲を永遠に失ってくれればいいのですが！ただ、正直なところ、あまり期待はしておりません。ともあれ、あらゆる危険を覚悟しながら、話を始めることにいたしましょう。

II

茶目っ気たっぷりの或る哲学者が、どこかでこう述べています。「田舎の別荘も、馬車も、馬も、決して持つてはいけない……それから狩猟地も！あなたの代わりにその種のものをしょい込んでくれる友達が、どうせ必ずいるのだから！」²⁾

この公理を実践することによって、私は、ソム県³⁾にある所有者専用の狩り場⁴⁾で——その持ち主になることなく——狩猟デビューを果たしたらどうか、というお誘いを受けたのでした。

記憶違いでなければ、1859年8月末のことです。県知事令によって、その翌日が狩りの解禁日と定められたばかりでした。

私たちの街アミアンでは、どんなにちっぽけな店の主人でも、しがない職人でも、なにがしかの銃を所持しており、街はずれの大道をそれで荒ら

2) ヴェルヌはバルザックが『結婚生活のささやかな悲惨』の中に引いている「ある英国の格言」——「新聞も、情婦も、田舎の別荘も、決して持つてはいけない。あなたの代わりにその種のものをしょい込んでくれる愚か者が、どうせ必ずいるのだから！」——をアレンジして用いている。以下を参照のこと。Olivier Dumas, « Verne et Balzac ou un misogynne lu par un autre », *Bulletin de la Société Jules Verne*, n° 62, 1982, p. 230-231.

3) フランス北部、ピカルディ地方にある県。県庁所在地はアミアン (Amiens)。

4) 1790年4月30日に制定された法律により、フランスでは狩猟権が土地所有者の手に帰することとなった(革命前は土地所有権とは無関係に貴族が狩猟高権を持っていた)。以後、ある猟区において狩りができるのは、「土地所有者」および「土地所有者から入猟許可を得た者」のみである。

してやろうと考えているわけですから——この晴れがましい一日は、少なくとも六週間前から皆に心待ちにされていたのでした。

その道のプロであり、「自信満々の」スポーツマンたちも、はたまた三流、四流の射撃手たちも、狙いをつけても仕留められた試しのない不器用な連中と同程度には狙いをつけずとも仕留められる器用な連中も、さらには一流どころの⁵⁾狩猟家に負けないくらい「精勤な」下手っぴどもも、この解禁日を目指して準備し、装備を整え、消耗品を買いこみ、訓練していたのですが、考えることといえばウズラのことばかり、話すことといえば野ウサギのことばかり、夢はといえばヤマウズラを手に入れることばかりでした！ 妻も、子供も、家族も、友人も、すべては忘却の彼方！ 政治も、芸術も、文学も、農業も、商業も、万事がこの重要な一日への強い関心を前に消え去ってしまいました——その日が来れば、あの不滅のジョゼフ・プリュドム⁶⁾が「野蛮な気晴らし」と呼んでもよかろうと考えた営為の熱烈な愛好者たちは、名声を手にすることができるのです！ ところで、アミアンにいた何人かの友人の中に、たまたま根っからの狩猟好き、とはいえ——役人ではあるものの——なかなか感じのいい男がいました。ただし、出勤しなければならぬときにはリウマチが少しつらいなどと言っているくせに、一週間の休暇をとって解禁日に猟に出かけられることになると、足の動きがやけに軽快に見えるのでした。

この友人、名前はブレティニョといいます。

-
- 5) 原文「di primo cartello」はイタリア語由来の表現であり、「一流の」「有名な」の意。『リトレ辞典』（1958年刊行のガリマール／アシュット版）によれば、この表現はフランスでは主に音楽家や声楽家に対して用いられていたという。
- 6) ジョゼフ・プリュドム (Joseph Prudhomme) はフランスの喜劇俳優・劇作家・風刺画家アンリ・モニエ (Henri Monnier, 1799-1877) が創造した人物であり、尊大・愚劣な俗物ブルジョワの典型。モニエはこの人物を主役に据えた戯曲『ジョゼフ・プリュドム氏の栄枯盛衰』(1853)を書き、その役を自ら演じ、その肖像を描いたうえ、『ジョゼフ・プリュドム氏回想録』(1857)という架空の自伝まで書いた。

大切な日の数日前に、ブレティニョが私に会いにきました——私の方では、よからぬ考えを抱いたりしてはしていなかったのですが。

「狩りをしたことがないのかい？」と彼は言いました——親切心2割に対し、軽蔑心が8割を占める、あの偉そうな口ぶりで。

「一度もないよ、ブレティニョ」と私は答えました。「でも、そんなことは、まったく……」

「じゃあ、解禁日にぜひ一緒においでよ」とブレティニョ。「ぼくら、獲物がわんさかいる専用の土地を200ヘクタール、エリサール⁷⁾の村に持っているんだ！一人なら、ゲストを呼ぶこともできる。だから、きみを招待して、お連れするよ！」

「それが……」と私はためらいながら言いました。

「銃がないのかい？」

「そうなんだよ、ブレティニョ。銃なんて、一度も持った試しがない」

「そんなの大丈夫さ！一丁、貸してあげるよ——槩杖^{さくじょう}式の銃⁸⁾だけど、それでも80歩の距離から野ウサギを撃って地面に転がすことができる！」

「命中すればね！」と私は答えました。

「そりゃそうだよ！——きみにはちょうどいいんじゃないかな」

「よすぎるくらいだよ、ブレティニョ！」

「でも、獵犬^{シヤン}も持ってないんだらう！」

「ああ！要らないよ、擊鉄なら、銃にも付いてるからね！……これ以上は余計さ！」

わが友ブレティニョはすっかりしない顔でこちらをじっと見ました。この男は、狩りについてこんなふうに駄洒落を言われるのが好きではないの

7) エリサール (Hérissart) はアミアンの北東約16キロの距離にある村。

8) 「槩杖」「ラムロッド」などと呼ばれる金属製あるいは木製の棒を用いて銃口から弾薬を詰めこむタイプの旧式の銃。

「狩りの十時間」

です。神聖なのですから、狩りというものは！

ともあれ、眉根に寄っていた皺がとれて、

「じゃあ、来てくれるね？」と訊いてきました。

「どうしても、と言うんならね！……」と私は熱意もなく答えました。

「もちろん……もちろんだよ！……あれは見ておいた方がいい、一生に一度くらいはね。土曜日の夕方に出発する予定なんだ。待っているからね」

以上のような次第で、私もこの冒険に加わることになったのでした——そのときの苦い思い出が、いまだに頭にこびりついて離れないわけですが。

とはいえ、正直なところ、準備については何の心配もしていませんでした。一時間の睡眠を奪われることさえなかったのです。しかし、洗いざらい申し上げてしまうと、好奇心の魔に、多少は刺激されておりました。あれほど言うからには、そんなに面白いものなのだろうか、解禁日というのは？ともあれ、自分から積極的に動くことはないにせよ、せめて野次馬として狩りや狩猟家たちの様子を観察してやろう、と心に決めていました。武器をしょい込むことに同意したのは、わが友ブレイティニョが、ぜひともあいつらが手柄を立てるところを見て楽しんでくれ、と言いながら私を誘ってくれた、この狩猟狂^{ニムロド}9)たちの中であって、あんまりむっつりしているのもよくないな、と思ったからです。

ただ、こう申し上げておく必要があるのですが、銃と火薬入れと散弾袋はブレイティニョが貸してくれることになったものの、獲物袋については話題にもなりません。ですから、この用具は購入しなければなりません——ほとんどの狩猟家にとっては、なくてもまるで問題ないかもしれない代物なのですが。私は中古のものを探しました。が、うまくいきませ

9) 「ニムロド」は旧約聖書『創世記』に登場する英雄的な狩人の名前だが、フランス語の普通名詞としては「狩りの熱狂的な愛好者」を指す。

ん。獲物袋については値上がりが起こっていたのです。どれも売り切れていました。そのため、新品を買わざるを得なかったのですが、その際にも未使用のままだったら——買ったときの半値で——買い戻してほしい、という厳しい条件を付け加えました。

お店の人は、私の顔をまじまじと見つめ、にやりと笑って引き受けてくれました。

この微笑みは、私には幸先のよいものとは思えませんでした。

「でも、結局のところ」と私は考えました。「結果がどうなるかなんて、まだ分からないじゃないか？」

ああ！ うぬぼれというやつは！

III

約束の日、つまり解禁日前日の夕方6時に、私はブレティニョが決めてくれた待ち合わせ場所であるペリゴール広場に来ていました。犬どもを勒定に入れないとすれば8番目の参加者として、乗合馬車の後部室ロトンドに乗りこんでいたのです。

ブレティニョとその狩猟仲間たちは——私にはまだ、自分自身を彼らの仲間の一人に数える厚かましきはありませんでした——伝統的な装具に身を包み、壮観でした。観察対象としても興味をそそる、狩猟家の見本のような連中です。明日の到来を待ちわびつつ真剣な面持ちでいる者もいれば、陽気で口数が多く、早くもエリサールの村にある専用の狩猟地を残らず言葉で荒らしている者もいます。

ピカルディ地方の中心都市¹⁰⁾でいちばん優れた銃の使い手が、そこには半ダースほど揃っていました。が、彼らのことはほとんど知りません。そこで、わが友ブレティニョに正式に紹介してもらわなければなりません

10) アミアンのこと。

した。

まずはマキシモンです。長身瘦躯、普段はこのうえなく穏和なのですが、猟銃を小脇に抱えた途端、狂暴になります——つまり、手ぶらで帰るくらいなら仲間の一人を撃ち殺しかねないと噂される、そんな狩猟家の一人なのです。彼は、マキシモンは口をききませんでした。高尚なる考えごとに没頭していたのです。

この重要人物のかたわらにはデュヴォシエルがいました。なんとというコントラスト対照でしょう！ デュヴォシエルの方は短躯肥満の体つきで、歳は55から60のあいだ、自分の武器の発砲音も聞こえないほど耳が遠いのに、誰の弾が当たったのかははっきりしない場合には声を荒げてすべて自分のものだと言います。そんなわけで、彼にはこれまでに一度ならず、弾をこめていない銃を持たせ、すでに死んでいる野ウサギを撃たせたのでした——これは狩猟家がよくやる悪ふざけの一つなのですが、こういったもののおかげで、半年ものあいだ、狩猟クラブや宿屋の食堂^{ターブル・ドット}¹¹⁾での会話が陽気なものになるのです。

私はまた、マティファの力強い握手も食らわねばなりません。狩りで立てたいざお勲しの、偉大なる語り手です。ほかのことについては決して話しませんでした。しかも、なんとという間投詞の数々でしょう！ なんとというオノマトペ擬声語でしょう！ ヤマウズラの鳴き声、犬の吠え声、銃の発砲音！バン！バン！バン！——二連銃であるにもかかわらず、「バン」は三回なのです！——それに、なんとというジェスチャーでしょう！ 獲物のジグザグ走行を真似るために手をともが艦權のように動かし、射撃の安定性を高めるために脚をたたんで背を丸め、武器を構えているのを示すために右腕を胸元に引きつけ、その一方で、左腕はびんと延ばしています！ 鳥獣どもを撃ち倒していたのです！ いったい何匹の野ウサギが、巣穴から飛び

11) ターブル・ドット (table d'hôte) は宿屋や下宿屋の食堂にある大きな会食用テーブルのことだが、そのテーブルが置かれている食堂そのものも指す。

だしたところを撃たれたことでしょう！一匹だって撃ちそこなってはいませんでした！——隅の席にいたところ、私まで、身振り一つで危うく殺されかけたのです。

ですが、一聴に値するのは、友人ポンクルエとしゃべっているときのマティファでした——同じ手の二本の指のように伸がよかったです——もっとも、片方がもう片方の専用狩猟地に少しでも足を踏み入れようものなら、訴訟合戦となることも考えられなくはなかったのですが。

「去年、俺が仕留めた野ウサギの数なんて」と、激しく揺れる馬車がエリサールの方へと進んでいくあいだに、マティファが話していました。「そうさ、俺が仕留めた数なんて、どうやっても勘定できねえな！」

「へえ！それなら私と同じじゃないか！」と私は思いました。

「ぼくの方はね、マティファ！」とポンクルエが応じました。「覚えてるかい、前回、アルグーヴ¹²⁾へ狩りに行ったときのことを？ねえ！あのヤマウズラどもときたら！」

「最初の一羽がまだ目に浮かぶぜ——運良く俺の散弾の雨をかいくぐっていきやがった！」

「ぼくは二羽目だ——羽根が見事に吹っ飛んで、骨には皮しか残らなかったはずさ！」

「それからあの、俺の犬が最後まで見つけられなかったやつだな——あの畝の溝に落ちちたのはまちがいないんだが！」

「それからあの、100歩も離れたところからぼくが思い切って撃っていたやつ——それにしても、絶対当たったと思うんだけどね！」

「それから俺の放った二発で……パン！パン！パン！ムラサキウマゴヤシの草むらに撃ち落としたり、あの別の一羽——あいにく俺の犬がべろりと平らげちゃまった！」

12) アルグーヴ(Argœuves)はアミアンの北西約6キロの距離にある村。

「狩りの十時間」

「それからちょうど弾をこめなおしているときに飛び立っていった、あの群れ！ プルルル！ 武者震いがするよ！ ああ！ なんていう狩りだ、みんな、なんていう狩りだ！」

ひそかに計算してみた結果、私にはよく分かっていました——ポンクルエとマティファのヤマウズラの中で、獲物袋に入ったものなど一羽もいなかったのだと。しかし、何を言う度胸もありませんでした。というのも、自分より詳しい連中と一緒にいると、私はおどおどしてしまう性質^{たち}なのですから。それに、獲物を仕留め損なうということについて言えば、私もまた——そうです！——人後に落ちないに決まっています。

ほかの狩猟家たちは、名前を失念してしまいました。が、私の記憶違いでなければ、そのうちの一人はバカラ¹³⁾というあだ名で知られていました。狩りのとき、「ひっきりなしに引いているのに一度も倒したことがない」¹⁴⁾からです。

実のところ、私もまたこのあだ名にふさわしいということにならないと、どうして分かるでしょうか？ いや、そんなはずは！ 功名心が私をとらえていました。翌日が来るのを心待ちにしていたのです。

IV

とうとうやってきました、その翌日が。しかし、あのエリサールの宿屋では、なんという夜を過ごしたことでしょう！ 八人に対して、部屋はたったの一つ！ そこに並んでいるおんぼろベッドでは、村の専用狩猟地でやるよりも獲物の多い狩りにありつけたかもしれません！ なにしろ、ベッドのそばに寝そべって床が揺れるほど体を搔いている犬たちと、おぞま

13) トランプを用いるカードゲームの一つ。

14) 「引く」(tirer)と「倒す」(abattre)の多義性を利用した言葉遊び。「引き金を引く」と「カードを引く」、「獲物を倒す」と「カードを倒す(=自分が勝ったことを示すためにテーブルの上に手札を広げて見せる)」がそれぞれ掛けられている。

しい寄生虫どもを兄弟のように分かち合うことになるのですから！

それなのに、この私ときたら、宿の女主人、もじゃもじゃ頭のピカルディのおばあさんに、寝室にノミはいませんよね、などと無邪気に尋ねたのです！

「まさか、いませんよ！」と彼女は答えたものです……。 「トコジラミが食べてしまいますからね！」

それを聞いた私は、体を動かすたびにぎしぎしと鳴る不安定な椅子の上で、服を着たまま眠ることに決めたのでした。おかげで、夜が明けるころにはぐったりしていました。

もちろん、起きたのは私が最初です。ブレティニョ、マティファ、ポンクルエ、デュヴォシェルとその仲間たちは、まだいびきをかいていました。夜が白むやいなや、朝食もとらずに出発したがる駆け出しの狩猟家のように、私は原っぱに出ていきたくてたまりませんでした。ですが、その道の達人たちは——一人ずつ、丁寧に私が起こしていったのですが——初心者ならでは私の性急さを、ぶつくさ言いながらたしなめたのでした。抜け目のない彼らは知っていたのです。夜明けのころのヤマウズラは翼がまだ朝露に濡れていて近づくのは至難の業だし、ひとたび飛び立てばもう自分から木蔭に戻ろうとはしないものなのだ。

というわけで、暁の涙を太陽が飲み干してしまうのを待たねばなりません。

とうとう、簡単な食事のあとで、お決まりの朝の一杯をきこしめし、私たちは宿を出ました——関節のあたりをほりほりと掻きながら。ついで、原っぱの方へと向かったのですが、所有者専用の狩猟地はそこから始まっています。

その境界のあたりまでたどり着こうというころ、ブレティニョが私を脇に引っ張り、こう言いました。

「銃は斜めにしっかり持って、銃口は地面の方へ向けて、人を撃ち殺し

たりしないように気を付けて！」

「最善を尽くすよ」確約したくなかったので、そう答えました。「でも、気を付けるのはお互いさまだよな？」

ブレティニヨは人を小馬鹿にしたように肩をすくめました。それから、狩猟開始です——誰に案内されることもなく——各自が気のおもむくままに。

このエリサールというのは、景観のいまいちな土地であり、地面が素っ裸なので、その名も妥当なものだとは言えません¹⁵⁾。ですが、モン＝スー＝ヴォドレ¹⁶⁾ほど多いわけではないにせよ、「隠れ場」¹⁷⁾には獲物がわんさかいるようだし、「野ウサギもごろごろいる」とマティファは言うし、追われて足をとめ、腹ばいになっている野ウサギを「こんなに要らないってくらい、たくさん」見たよ！ とボンクルエも付け足すのでした。

こんなふうには、どんどん撃てそうだし、という見通しがあるので、この愉快な連中は一人残らずご機嫌でした。

というわけで、前進です。お天気は、素晴らしいの一言。矢のような日射しがそこそこで朝霧を貫き、その渦が地平線に集まっていました。いたるところから、鳥の鳴き声が、さえずりが、クークー鳴く声が聞こえてきます。バネから急に手を放したときの飛行玩具のように^{ヘリコプター}敵から飛びあがり、一直線に空へと昇っていく鳥たちもいました。

一度ならず、我慢ができなくなって、銃をさっと構えたのですが、「撃っちゃだめだ！ 撃っちゃだめだ！」とそのたびにわが友ブレティ

15) 「エリサール」(Hérissart) という地名は音や綴りのよく似た「hérissier」という動詞(「逆立つ」の意)を想起させる。ところが、現実のエリサールには木々が乏しく、地面に「逆立つ」ものが見当たらない。そのため、地名から受けるイメージとその土地の実際の様子とのあいだに齟齬がある、ということ。

16) モン＝スー＝ヴォドレ(Mont-sous-Vaudrey)はフランス東部、ジュラ地方にある村。ディジョンの南東、プザンソンの南西に位置する。

17) 原語「fort」は狩猟用語として「森や茂みの奥深くにある動物の隠れ場」を指す。

ニョが声をあげました。さりげなく私を見張っていたのです。

「どうして？ あれはウズラじゃないの？」

「ちがうよ！ ヒバリだよ！ 撃っちゃだめだ！」

マクシモン、デュヴォシエル、ポンクルエ、マティファと他の二人が、すでに何度か私の方へ不信のまなざしを投げかけていたことは言うまでもありません。その後、彼らは慎重に、犬を連れて、私から離れていきました。犬たちは鼻を地面に向け、ムラサキウマゴヤシやイガマメやクローバーの中に分け入り、小刻みに走りながら獲物を探していたのですが、しっぽを反り返らせて盛んに振るので、それらは一本一本がクエスチョンマークのように見えました。そんなに疑問符を突き付けられても、私にはどう答えていいか分からなかったにちがいません。

私はこう考えました。この人たちは、未熟者の銃に脛骨でも撃たれるのではないかと少々不安になり、危険地帯にいつまでも居残っているのは気が進まないのだ、と。

「ほらほら！ 銃はしっかり握っておいて！」離れていこうとするときに、ブレイティニョが私に向かって繰り返しました。

「もう！ 人並みにしっかり握っているじゃないか！」潤沢すぎる忠告に少し苛立って、私は答えました。

またしてもブレイティニョは肩をそびやかし、左の方へ曲がっていきました。後ろに取り残されるのは本意ではありませんでしたので、私もまた足を速めました。

V

仲間たちに追いつきはしたものの、もう彼らを怖がらせずに済むように、銃床の方を上に向けて、銃を肩に担いでいました。

狩猟服に身を包んだ彼ら、プロの狩猟家たちは、なんと立派に見えたことでしょう。白の上着、ゆったりとしたコーデロイのズボン、靴底の方

「狩りの十時間」

が甲革をはみ出している幅広のスパイク靴、すぐにかすり傷をつくってしまふ——ということに、私もまもなく気がつくわけですが——麻や綿の靴下よりも好ましい、ウールの靴下を上から覆っている亜麻布の脚当て。中古の装具に身を包んだ私は、到底こんなふうに着好よくはありませんでした。ですが、ベテラン俳優と同等の衣装ダンスをもちなさい、と新人に要求するのは酷というものです。

ところで、獲物とはいえば、何も見当たりませんでした。ですが、この専用の狩り場にウズラが、ヤマウズラが、ウズラクイナが、それからわが仲間たちが「^{トロフ=カール}若ウサギ」¹⁸⁾と呼び、さんざん話題にしている一月生まれの野ウサギが、それから子ウサギが、さらには雌ウサギが、わんさかいることは信じなくてはなりません。なにしろ、彼らがそう断言しているのですから。

「でもね」とわが友ブレティニヨは言っていました。「子どもを孕んでいる雌ウサギは撃っちゃだめだよ！ そんなのは、狩猟家にあるまじきことだ！」

孕んでいるか、いないかなんて、私に分かるわけがありません。まだようやくウサギを野良猫から見分けられるかどうか、といったところなのですから——ジブロット¹⁹⁾になっていたとしても！

最後にブレティニヨは、私をダシにしてどうしてもいいところを見せたいらしく、こう付け加えたのでした。

「あと一つだけアドバイスがあるんだけど、これは野ウサギを撃つときに重要になってくるかもしれない」

「通りがかってくれればね！……」と私は嫌みをこめて指摘しました。

「通りがかってくれるさ」とブレティニヨも冷淡に応じました。「ええと、

18) 原語「trois-quarts」は「4分の3」の意だが、狩猟用語としては「ほぼ成獣になった雄の子ウサギ」を指す。

19) ウサギの白ワイン煮込み。

覚えておいてほしい。体のつくりのせいで、野ウサギは坂をおりるときよりものぼるときの方が走るのが速いんだ。撃つ方向を決めるときには、そのことを勘定に入れておく必要がある」

「よくぞ教えてくれたね、ブレティニョ君！」と私は返事をしました。「このご指摘、無駄にはしないよ。約束しよう、きっと役立ててみせると！」

ですが、心の底ではこう思っていたのでした。たとえ坂をおりているときであっても、野ウサギの走りは速すぎて、殺意に満ちたわが散弾で足止めすることはできまい、と！

「さあ、狩りだ、狩りだ！」とそのときマクシモンが大声をあげました。「初心者どもを鉢に植えて育てるために、ここまで来たわけじゃないんだからな！」

なんてひどいやつでしょう！ とはいえ、意気地がなくて、何も言い返せませんでした。

私たちの向かう先は、見わたすかぎり、右にも左にも広大な原っぱが広がっていました。犬どもが先頭を進んでいます。飼い主たちは方々に散っていました。その姿を見失わないように、私はできるかぎりのことをしていました。というのも、ある考えに悩まされていたのです。つまり、もともと悪戯好きな仲間たちが、私が経験不足であるのをいいことに、悪さをしたくなったりするのではないか、と。ある狩りの初心者が、その友人たちのせいでボール紙のウサギを撃たされた、という笑い話を私は心ならずも思い出していました。そのウサギの玩具は、やぶの中に尻もちをついて座ったまま、嘲るかのごとくに太鼓を叩いていたそうです！ そんなふう一杯食わされてしまったら、私は恥ずかしさのあまり、死んでしまうかもしれません！

その間も、犬たちのあとを追いながら、麦の刈り株のあいだを縫うようにして、私たちはやや行き当たりばつりに彷徨っていました。このまま

「狩りの十時間」

行けば、3、4キロ先に見えていて、^{じょうへん}上辺を背の低い木々に縁どられていた土手に着くことになりそうです。

この健脚の連中は、皆、湿地や耕作地といった歩きにくい土地に慣れていますから、私がどんなにがんばったところで、それよりもさらに速いペースで進んでいます。そのため、じきに引き離されてしまいました。初めのうちは私を惨めな状況に打ち捨てておくのを潔しとせず、歩調を緩めてくれていたブレティニョですら、最初の射撃に加わりたくて、すでに急ぎ足になっていました。きみを恨んだりはいらないよ、ブレティニョ君！ 友情よりも強力な本能というやつに、きみは容赦なく引っ張られていたのだから！……そして、まもなく私には仲間たちの頭しか見えなくなったのですが、その様子は、茂みの上に、人数分、スパードのエースが飛びだしているようでした。

いずれにせよ、エリサールの宿を出てから二時間が経過していましたが、銃声はまだ一度も耳にしていませんでした—— ええ、ただの一度も！ 帰りも行きと同じくらい獲物袋がペしゃんこだったら、どれほど機嫌が悪くなり、どれほど不平が口にされ、どれほど不満がぶちまけられるか、先が思いやられます！

ところで、信じていただけるでしょうか？ 一発目を撃つチャンスは、なんとこの私のところに転がりこんできたのです。どんな経緯でそうなったのかを申し上げるのは、たいへんお恥ずかしいのですが。

白状してしまいませんか？ 私の銃にはまだ弾がこめられていませんでした。初心者にありがちなうっかりミス？ いいえ！ 自尊心の問題なのです。この操作をするときに、不器用きわまりない様子を人に見られるのが気がかりだったので、一人きりになってからしようと思っていたのです。

というわけで、誰も見ていないところで火薬入れを開け、左の銃身に装薬を流しこみ、それをただの紙のおくり²⁰⁾で固定しました。ついで、その

上に散弾をたっぷりと入れました——大は小を兼ねるでしょうから。だって、分からないではありませんか！ 散弾を一つ余分に入れておいたおかげで、手ぶらで帰らずに済むことだってあるかもしれません！ 続いて、銃尾が破裂しそうになるほど詰め詰め、最後に——ああ、なんて不意だったのでしょうか！——弾をこめたばかりの銃身の火門座に雷管をかぶせたのです。

それが済んだら、右の銃身にも同じ作業。ですが、中に詰めているあいだに、なんという爆発音が！ 暴発です！……最初の装薬がまるごと私の顔を掠めていきます！……左の銃身の撃鉄を雷管の方に戻すのを忘れていたせいで、ちょっとした振動で撃鉄が落ちてしまったのです！

初心者の皆さん、ご用心あれ！ 危うくソム県での狩猟の解禁を、嘆かわしい事故によって広く知らしめてしまうところでした。地方紙にすれば、なんという三面記事でしょう！

しかしながら、もし、あの弾が不注意のせいで発射されてしまった瞬間に、もし——そうです！ そんなことも思い浮かんだのです！——もし弾丸の飛んでいった方向に、なにがしかの獲物が通りがかっていたとしたら、きっと仕留めていたのです！……こんなチャンス、もう二度とめぐってこないかもしれないというのに！

VI

そうこうしているうちに、ブレティニョとその仲間たちはもう土手のところまで着いていました。そこで足をとめ、悪運を祓うにはどうすればいいかを話し合っていたのです。私もまた、今度は細心の注意を払いつつ銃に弾をこめ直したうえで、彼らのそばまで到着しました。

話しかけてきたのは、マクシモンでした——ただし、いかにも達人に

20) 銃や銃弾の火薬を固定するための詰め物のこと。

「狩りの十時間」

ふさわしい、高飛車な口調で。

「あんたが撃ったのかい？」

「ええ！……つまり……そうです！……私が撃ちました……」

「ヤマウズラを？」

「ヤマウズラを！」

何があろうと絶対に、私がこの裁きの場^{アレオバージュ}²¹⁾で自分の不手際を告白することはなかったでしょう。

「で、どこにいるんだい、そのヤマウズラとやらは？」とマクシモンが訊いてきました——私の空っぽの獲物袋を銃の先でつつきながら。

「それが、見失ってしまったんですよ！」と私は図々しく答えました。「だって、仕方がないでしょう？ 私には犬がいなかったんですから！ ああ！ 犬さえいてくれれば！……」

ほら、ほら！ これくらいの厚かましさがあれば、本物の狩猟家にもなれないわけがありません！

不意に、私の受けていた尋問が荒っぽく中断されました。10歩も離れていないところで、ポンクルエの犬がウズラを飛び立たせたのです。思わず、本能的に、と言っても構いませんが、私は銃を頬にあてて狙いを定め……マティファの言いようを借りれば、パン！ とやりました。

構えが悪かったせいで、なんというビンタを食らったことでしょう！——もともと、誰のせいにするともできない類のビンタではありましたが。ところが、私の撃ったあとすぐに別の弾が、ポンクルエの弾が続きました。

穴だらけにされてウズラが落下し、犬がそれを運んでくると、主人は自分の獲物袋にそれを収めました。

21) 原語「aréopage」とは古代ギリシャにおける評議・裁判の場「アレオパゴス会議」のこと。フランス語の普通名詞としては「評議会」や「有識者会議」を指すこともある。

皆、私がこの虐殺に何らかのかたちで関与していたのではないかと公正に考えてくれることさえなかったのです。しかし、私は黙っていました。何を言う勇気もなかったのです。ご存じのとおり、私は自分より詳しい連中と一緒にいると、おどおどしてしまう性質なのでありますから！

まちがいなく、この一つ目の成功が、熱狂的な獲物の殺戮者全員の欲望をかき立てたのでした。考えてもみてください！ 狩猟家七人で三時間も狩りをして、ウズラが一羽だなんて！ そんな馬鹿な！ エリサールのこの豊かな土地に、せめてもう一羽、ウズラがいないなんてことはあり得ません。そして、そのもう一羽を仕留められれば、戦闘員一人につきウズラがほぼ3分の1羽ということになるのです。

土手を越えると、またしても耕作地の広がる忌まわしい土地に出ました。畝をまたぐ必要があるので疲れるし、土くれと土くれのあいだで足をひねってしまうので、私にはまるで歓迎すべきものではありません。大通りのアスファルトの方がはるかに好ましく思えます。

猟犬の群れを連れた私たちの一団は、そんなふうにして二時間歩きましたが、何も見つかりませんでした。眉間にはもう皺が寄っていました。木の切り株につまずいたとか、犬が別の犬の進路を横切ったというような何でもないことについても、ある種の乱暴な怒りやすさが目につくようになっていました。要するに、皆が不機嫌になっていることの明らかな徴候です。

とうとう現れました——40歩先のテンサイ畑の上を、ヤマウズラが飛んでいます。それを群れと呼んでいいものかどうか、私には断言する勇気がありません。あるいは、極限まで実動員数の減らされた群れというべきなのかもしれません。

なにしろ、二羽のヤマウズラのみで構成されていたのですから。

まあ、それはたいしたことではありません。私は群れの中に弾を撃ち込みました。すると、今度もまた私の発砲に続き、即座に二発。ポンクルエ

「狩りの十時間」

とマティファが、ようやく同時に火薬にものを言わせたのです。

哀れな飛禽の一羽が落ちてきました。もう一羽はますます力強く飛び、そこから1キロ離れたところ、大きく波打つ土地の向こうまで難を逃れにいました。

ああ！ はた迷惑なヤマウズラよ、きみはなんとという口論を引き起こしたことだろう！ マティファとボンクルエのあいだに持ちあがった論争ときたら！ 二人とも、自分こそが鳥殺しの張本人なのだと主張していました。それにまた、なんとという辛辣なやりとりでしょう！ なんとという侮辱的な当てこすり！ なんとという嘆かわしいほのめかし！ それにまた、形容詞の数々ときたら！ 独り占め野郎！……全部俺のものだって言うんだろう！……恥知らずな連中はとっとと失せろ！……一緒に狩りをするのもうごめんだ！……ほかにもまだ、これに輪をかけてピカルディ的な嫌みの数々が口にされましたが、それは私のペンが文字にするのを拒んでいます。

真実を申しますと、この紳士たちの二発は同時に発射されていたのです。

また、第三の発砲もたしかに行われており、しかもそれは他の二発に先んじていました。ですが——このことについては議論の余地さえなかったのです！——あのヤマウズラの羽に傷をつけたのは私だったということが、はたして受け入れられたでしょうか？ 考えてもみてください、初心者ですよ！

というわけで、ボンクルエとマティファの口論に割って入らなければならないとは、私は思わなかったのです——二人を仲直りさせてやろう、という鷹揚な考えからであっても。また、異議を唱えたりもしなかったわけですが、それはやはり、私がおどおどしてしまう性質であり……この文の続きは、すでにご存じのとおりです。

VII

私たちの胃にとっては何とも喜ばしいことに、ようやく正午を迎えていました。斜面の下、楡の老木の木蔭で私たちは足をとめました。猟銃が、それから、ああ！ 空っぽのままの獲物袋が、かたわらに置かれました。ついで、出発してからというもの、かくも虚しく浪費されてしまった体力をいくらかでも取り戻すために、昼食をとりました。

結局のところ、侘しい食事です！ 頬ばる食べ物と同じくらい、文句が出てきます！ いけ好かない土地だ！……警備の行き届いた狩り場だって！ 密猟者どもが荒らしてるんだ！……あの連中は、罪状を書いた札を胸に貼り付けて、一人ずつ木に吊るしてやらなくちゃ！……狩りはもうできなくなりつつあるんだ！……2年もすれば、獲物なんてすっからかんだ！……しばらく禁止にしたらいんじゃないか？……そうだ！……いや、ちがう！……しまいには、日の出からまだ何も仕留められていない狩猟家たちの不平不満が連祷のように口にされるのでした！

それからまたボンクルエとマティファの口論が始まりました。「共有」状態で争われている、あのヤマウズラについてです。他の連中も口をはさんできました……。このまま殴り合いになるのではないかと思ったほどです。

結局、一時間後にまた全員が歩き始めました——この土地の言葉でいえば、存分に腹に詰めこみ、存分に「のどを湿らせた」うえで。ひょっとすると、夕食前にはもっと幸せな気分になっているのではないのでしょうか！ 真の狩猟家たるもの、ヤマウズラが家族で集まって夜を過ごそうと「鳴き交わす」²²⁾のを耳にする時刻までは、わずかなりとも希望を持ち続けるものなのです。

22) 原語「rappeler」は「～を呼び戻す」といった意味の動詞だが、狩猟用語としては「ヤマウズラがはぐれた仲間を求めて鳴き交わす」ことを指す。

「狩りの十時間」

というわけで、再出発しました。私たちに勝るとも劣らず不機嫌になっている犬たちが先頭に立ちました。主人らも後ろからがなり立てているのですが、そのぞっとするような抑揚はイギリス海軍の号令に似ていました。

おぼつかない足どりで、私もあとについていました。へとへとになりつつありました。獲物袋は空っぽなのに、ずしりと腰に負荷をかけていました。猟銃は信じられないくらい重く、普段使っているステッキが恋しくなりました。火薬入れにせよ、散弾袋にせよ、この種の邪魔なものはすべて喜んでくれてやったはずです——「四つ足ども」²³⁾を何頭仕留めたのかと訊きながら、からかうような様子でついてくる土百姓の一人に！ ですが、自尊心のせいで、そこまでする踏ん切りはつきませんでした。

二時間、退屈きわまりない二時間がさらに過ぎていきました。優に15キロは歩き、疲れ切っていました。明々白々と思われたのは、これほど方々を歩き回っても、私に持ち帰ることのできるのは半ダースのウズラよりもむしろ筋肉痛の方だろう、ということでした。

不意に、なんという羽音が聞こえてきたことでしょう——慌てふためいてしまいます！ 今度こそはまちがいなく、茂みの上に飛び立つヤマウズラの群れです。一斉射撃！ 撃ち放題だ！ 私のものも入れて、少なくとも15発の銃弾が放たれました。

白煙の向こうから、叫び声が聞こえてきます！ じっと目を凝らしていると……。

茂みの上に、人影が現れました。

クルミの実でも口に入れているかのように、右の頬を腫らした農夫です！

「おや！ 事故だ！」とブレティニョが声をあげました。

「悪いときには悪いことが重なるものだな！」とデュヴォシエルが応じ

23) 原文「ché quat'patt's」はフランス北部の訛りを文字で表現している。標準的な綴字法であれば「ces quatre pattes」（四つ足の動物たち）となる。

ました。

法典で言うところのこの「過失傷害罪」について、彼らが思ったことはそれだけでした。そして、血も涙もないこの連中は、怪我をただけでまだ死んでいない二羽のヤマウズラを運んでくる犬たちの方へと駆け寄ると、この不運な鳥たちにブーツの踵でとどめを刺したのです！ この連中も同じ目に遭えばいいのに、と私は思っています——いつか、とどめを刺してもらう必要が出てきたときには！

その間、例の地元民は、頬を腫らしたまま、口をきくこともできず、ずっと同じ場所に居残っていました。

しかし、そこにブレティニョとその仲間たちが引き返してきます。

「おや、この御仁はいったいどうしちゃったんだ？」保護者ぶった口調でマクシモンが尋ねました。

「ほら！ 頬っぺたに散弾を食らったんですよ！」と私が答えました。

「なあに！ たいしたことはない！」とデュヴォシエルが即座に言い放ちました。「たいしたことはないさ！」

「うんにゃ！……うんにゃ！……」と農夫。おそろしく顔をしかめることで、怪我のひどさを強調しなければならないと思ったのでしょう。

「でも、この気の毒な人に怪我をさせてしまうほどの下手くそといったら、いったい誰だろう？」とブレティニョが疑問を口にし、その尋問するような視線が最後に私のところまで来てとまりました。

「あんた、撃たなかったか？」とマクシモン。

「ええ！ 撃ちましたとも……皆さんと同じように！」

「それじゃ、謎は解けたな！」とデュヴォシエルが声をあげました。

「きみはナポレオン一世と同じくらい下手っぴな狩猟家だね」と帝政嫌いのボンクルエがあとに続きました。

「私が！ 私がですって！……」と私は叫びました。

「きみでしかあり得ないじゃないか！」とブレティニョが厳しく言い放

「狩りの十時間」

ちました。

「まちがいなく、このお方は危険人物だな！」とマティファもあとに続きました。

「それにね、そこまで経験不足なんだったら」とポンクルエが付け足しました。「どこからお誘いが来たにせよ、断らなくちゃだめだよ！」

そう言うと、三人全員が去っていきました²⁴⁾。

なるほど。負傷者を私に押しつけていったのです。

後始末をしました。財布を取り出し、この純朴な農夫に10フラン²⁵⁾をあげたのです。その右頬からはすぐさま腫れが引いていきました。きつとクルミを呑みこんだのでしょう。

「よくなりましたか？」と私。

「わ、ほら！……ほら！……また来ただよ！²⁶⁾……」今度は左頬を膨らませて答えます。

「いや！ だめです！」と私は言いました。「だめだめ！ 今回は片方の頬だけで十分でしょう！」

そして、私もまた立ち去ったのでした。

VIII

そんなふうにして、私がこの抜け目ないピカルディ人と話をつけているあいだに、他の連中は先へ進んでいました。そもそも、私のような不器用な人間の近くにいると安心できないということを、彼らはもう十分に私に知らしめていたのです。人並みの用心深さがあれば、私みたいなやつから

24) 「三人」はヴェルヌの誤記か。この場面では語り手以外に少なくとも五人が台詞を口にしている。

25) 一般に、19世紀フランスの1フランは現代の日本円にして500~1,000円程度と考えられている。

26) 原文「Cho m'r'prind」はフランス北部の訛りを文字で表現している。標準的な綴字法であれば「Ça me reprend」。

は離れていたくなるはずだ、と。

ブレティニヨまでもが手厳しく、とはいえ不当なことに、私を見捨てようとしていました——まるで私が邪眼を持つ厄病神^{イェツクホーレ}でもあるかのよう。じきに全員が、左手の小さな林の向こうへと姿を消しました。念のために言うておけば、私はこんな仕打ちを受けてもさほど腹を立ててはいませんでした。少なくとも、今後は自分のしでかしたことだけに責任を持てばいいわけですから！

というわけで、私はひとりぼっち、果てしなく広がるこの野原の真ん中で、ひとりぼっちでした。こんなところまで、いったい何をしに来たのでしょうか、まったく！ こんな重装備を背負って！ 一発お見舞いしてほしいと頼んでくるヤマウズラの一羽すら見当たりません！ ピカルディの農民言葉でいうところの「野ウシャギ」²⁷⁾も、一匹たりとも見かけません！ 一匹でもいれば、その「走り」^{ランドネ}²⁸⁾を——これは狩猟家たちのスラングの一つです——追うこともできたでしょうけれど。心穏やかに自分の仕事部屋にいて、読んだり、書いたり、あるいは何もせずに過ごしたりしていればよかったのに！

私はあてもなく歩いていました。耕作地よりは、人の足に踏み固められた小道を選びながら。10分腰をおろしては、20分歩きました。半径5キロ以内に家屋はありません。地平線にそびえ立つ鐘楼もありません。無人の荒野です。ときおり案内標識が現れて、人を煙に巻くようなこんな文句で闖入者を脅かしています——専用の狩り場。

専用？ 獲物たちの「専用」でないことは確かです——なにしろここには全然いる気配がないのですから！

27) 「野ウサギ」(標準的な綴りは「lièvre」)がここでは「ieuvre」と表記されている。

28) 原語「randonnée」は主にハイキングなどの「遠出」や「小旅行」を意味する名詞だが、狩猟用語としては「狩り立てられた獲物が同じ場所をぐるぐる走り回ること」を指す。

「狩りの十時間」

結局、私はなおも歩きました——夢想到に浸りながら、哲学に耽りながら、銃を肩に吊るしたまま、足を引きずって。私の好みからすれば、太陽は申し分のない速さで地平線に降りているとは言えませんでした。狩りに熱狂するわが仲間たちを大いに喜ばせるために、ヨシユア²⁹⁾の再来か誰かが、宇宙誌的な法則を一時的に失効させて、昼の行路の途中で太陽の歩みを停めてしまったのでしょうか？　ということはつまり、この散々な狩猟解禁日には夜は来ないのでしょうか？

IX

ですが、どんなものにも限度があります——所有者専用の狩り場の敷地にも。目の前に林が現れ、それが野原をさえぎっていました。あと1キロで、そこまでたどり着けるはずです。

というわけで、足を速めることなく歩き続けました。1キロが踏破され、林の入口に到着です。

遠くで、ものすごく遠くで、7月14日の花火の花束のように、銃声^{シュー}が轟いていました³⁰⁾。

「やつら、皆殺しにしているな！」と私は思いました。「まずまちがいなく、来年の分は残らないだろうよ！」

すると、そのとき——まったく、われわれときたら困ったものです！——原っぱよりも林の中にいた方が幸運に恵まれやすいかもしれないぞ、という考えが頭に浮かびました。木々の梢には、一流レストランで小粋に串に刺され、モヴィエット³¹⁾という名前で出てくるあの罪なきスズメが必

29) 旧約聖書に登場するユダヤ人の指導者。太陽と月の運行をほぼ一日停止させる場面が『ヨシユア記』にある。

30) 1789年にバスティーユ襲撃が行われた日付である7月14日を「フランス国民の祝日」とする法律が公布されたのは1880年のことであり、ヴェルヌはその翌年にこの「狩りの十時間」を発表している。

31) 脂の乗ったヒバリのこと。美味とされる。

ず何羽かいるはずです。

というわけで、大きな街道へと至る林道をたどることになりました。

まったくもって、またしても狩猟の魔が私奴^{わたくしめ}を捕えていたのです！
そうですとも！ 銃はもう肩にかけてはおらず、丁寧に弾をこめ、撃鉄を
起こしてありました……。私の視線は期待にじりじりしながら右へ左へと
向けられていました。

いません！ スズメどもはきつとバリのレストランを警戒し、身動きせ
ずにいたのです。一度か二度、私は銃を構えました……。木々に揺れてい
るのは木の葉だけ、さすがの私も木の葉を撃つ気にはなれません！

時刻は5時でした。40分もすれば宿に戻って夕食をとり、それから人
も、獣も、生者も、死者も、全員一緒にアミアンまで馬車で連れ帰って
もらうのだということを私は知っていました。

ですから、目はなおも光らせたまま、エリサールの方へと斜めにのびて
いくいちばん大きな林道を進み続けたのでした。

ふと、足をとめました……。心臓の鼓動が少し速くなりました！ 50
歩ほど離れた茂みの下、茨とやぶのあいだに、まちがいなく何かがいるの
です。

それは、黒っぽくて、銀色の縁どりと、鮮紅色の尖端部分があり、熱の
こもった瞳のように私を見つめていました！

疑いようもなく、獣毛か羽毛のある獲物が——そのどちらなのかを言
うことは私にはできなかつたでしょうけれど——狩り出されて、そこに
隠れていたのです。私は野ウサギ——少なくとも若ウサギ^{トロワ=カール}——と雌のキ
ジのどちらかではないかと思っていました。そうだ！ そうに決まってい
る！ 獲物袋をキジで膨らませて帰ったら、仲間たちの心の中で、私の地
位は爆上がりするにちがいありません！

というわけで、いつでも銃を構えられるような態勢をとり、慎重に近づ
いていきました。息は殺していました。気持ちが高揚していた——そうで

「狩りの十時間」

す！ デュヴォシエル、マキシモン、ブレティニョを足したくらいに気持ち
ちが昂っていたのです！

最終的に、ほどよい距離——約 20 歩——まで来ると、射撃の精度が
増すように地面に膝をつき、右目はしっかりと開き、左目はしっかりと閉
じ、照準点をしっかりと溝に合わせ、狙いをつけて発砲しました。

「命中！」と我を忘れて絶叫しました。「今度は文句なんて言わせないぞ、
私が撃ったんだ！」

事実、この目で見たのです——そうですとも！——羽毛が……あるい
はむしろ、獣毛が舞うのを。

犬がないので、私は自分で茂みの方へと走り寄り、ピクリとも動かず、
もはや生きているようには見えない獲物にとびかかりました！ そして、
拾いあげてみると……。

それは、全体に銀の縁どりのある憲兵の帽子でした。帽章が付いていて、
その赤い部分が私を見つめる目玉のように見えていたのです！

幸いなことに、私が撃ったとき、その帽子は持ち主の頭の上には載って
いませんでした！

X

そのとき、草の上に長々と寝そべっていた体が起きあがりました。

場違いな銃撃のせいで目覚めてしまった^{バンドール³²⁾}憲兵³²⁾の、黒いラインの入っ
た青いズボン、銀ボタンの付いた暗い色の略式軍服、黄色いベルトと武器
の吊り革を、私は恐怖とともに認めました。

「およそ今般は憲兵の帽子を撃つようになったのですかな？」この組織
を特徴づけている妙なしゃべり方で、彼は言いました。

32) 原語「Pandore」は憲兵 (gendarme) の俗称。ギュスターヴ・ナドー (Gustave Nadaud, 1820-1893) が作詞・作曲したシャンソン「バンドールあるいは二人の憲兵」(Pandore ou les deux gendarmes) に出てくる憲兵の名前が普通名詞として使われるようになったもの。

「憲兵さん、誓って申しますが！……」と私は口ごもりながら答えました。

「しかも、およそ帽章のど真ん中を撃ち抜いたんですな！」

「憲兵さん……私は……野ウサギだと思ったんです！……見まちがいでした！……とはいえ、ぜひ弁償を……」

「ほほう！……およそたいへん高くつきますぞ、憲兵の帽子は……特に無免許で撃った場合には！」

私は真っ青になりました。体中の血が心臓へと逆流していきます。まさに微妙な点を突かれてしまったのです。

「およそ免許はお持ちですか？」と憲兵^{バンドール}が訊いてきました。

「免許？……」

「そうです！ 免許です！ 免許の何たるかは、よくご存じでしょうか？」³³⁾

いや、まさか！ 免許など持っていませんでした！ たった一日の狩りのために、免許を取る必要などないだろうと思っていたのです。とはいえ、こういった状況で人が必ず主張するようなことを、私もまた主張しなければならぬまいと考えました。つまり、免許は忘れてきてしまったのだと。

法の代理人の顔に、高慢かつ圧倒的な不信の笑みが浮かびました。

「およそ調書をとらなければなりません！」報奨金が視界にちらついている者にありがちな穏和な口調で彼は言いました。

「どうしてですか？ 明日になったらさっそくお送りしますよ、その免許とやらを、優しい憲兵さん、それに……」

「ええ！ 分かっておりますとも」憲兵^{バンドール}は答えました。「ですが、およそ調書をとらねばならんです！」

「それでは、おとりください。初心者からのお願いにも、あなたは心を

33) 1844年5月3日に制定された法律により、フランスでは狩猟を行う際に狩猟免許を所持することが義務づけられた。

「狩りの十時間」

動かされないんですからね！」

心を動かされやすい憲兵など、もはや憲兵とは言えないでしょう。彼は黄ばんだ羊皮紙に包まれた手帳をポケットから取り出しました。

「およそお名前は何とおっしゃるのですかな？……」

そら、来た！　このような深刻な事態に陥った場合には、誰か友だちの名前を当局に伝えるのが常套手段なのだ、私も知らないわけではありませんでした。もしも当時、私がアミアン・アカデミーの会員になるという栄誉に浴していたら、たぶん躊躇なく同僚の一人の名前を売り渡していたことでしょう。ですが、パリに住んでいたころの旧友の一人、才能豊かなピアニストの名前を挙げるに留めておきました。あの気立てのよい青年は、ちょうどそのとき、きっと薬指の練習に全身全霊で打ち込んでいて、狩猟法違反の罪で自分の供述調書がとられているなどとは夢にも思っていなかったはずです！

憲兵^{バンドール}は、この犠牲者の名前、職業、年齢、住所を念入りにメモしました。ついで、猟銃をこちらに預けてください、と礼儀正しく頼んできたので——私もいそいそとそれに応じました。その分だけ持ち物が軽くなるというものです。私はさらに獲物袋、散弾袋、火薬入れも没収対象に含めてほしいと頼みこみましたが、断られました。どうも無欲な人だったようで、残念です。

あとは帽子の問題が残っていましたが、これについては金貨一枚を支払うということで、当事者双方が納得するかたちで、ただちに解決を見ました。

「もったいなかったですね」と私。「この帽子、まだ状態もよかったのに！」

「新品同然でしたよ！」と憲兵^{バンドール}は答えました。「およそ退職する憲兵班長から6年前に買いとったものなのです！」

そして、規定どおりの所作でその帽子をかぶり直したあと、威厳たっぷ

りのその憲兵は、上半身を揺すりながら自分の進むべき方向へと——私は私で、自分の進むべき方向へと——立ち去ったのでした。

その一時間後にはもう宿屋まで帰り着いていたのですが、銃が没収されてなくなっていることは精一杯隠し、それにまつわる災難についても口をつぐみました。

ちなみに仲間たちは、七人がかりでようやくウズラー羽とヤマウズラ二羽を遠征から持ち帰っていました。ボンクルエとマティファは口論してからというものの犬猿の仲ですし、マクシモンとデュヴォシエルのあいだでも拳が交えられたようです。その原因となった野ウサギは、なおも元気に走り回っているのだとか。

XI

以上が、記憶さるべきこの一日のあいだに、私が次から次へと味わった喜怒哀楽の数々です。私はウズラを仕留めたのかもしれないし、ヤマウズラを仕留めたのかもしれないし、農夫を負傷させたのかもしれませんが、ごく確かなこととしては、憲兵の帽子を穴だらけにしたのでした！ 無免許なのを見咎められて、私に対する調書が作成されたわけですが、それはじつは別人の名前で書かれたものでした！ 当局を騙したのです！！アンダーソン³⁴⁾やベルテュイゼ³⁵⁾のような人々のキャリアに足を踏み入れようとしている駆け出しの狩猟家に、これ以上、何が起こり得るでしょうか？

34) 不詳。ヴェルヌは「Anderson」と綴っているが、スウェーデンの探検家アンダーソン (Charles John Andersson, 1827-1867)、あるいはイギリスの博物学者サンダーソン (George Peress Sanderson, 1848-1892) の名前の誤記か。前者は狩猟家として著名であるうえ、アフリカ南部を探検し、多くの旅行記を残したことで知られる。後者はイギリス統治下のインドで野生の象の狩猟・捕獲システムを作り出し、「エレファント・キング」の異名をとった。

35) ウジェーヌ・ベルテュイゼ (Eugène Pertuiset, 1833-1909) はフランスの探検家、作家、画家。アフリカで猛獣狩りに参加した経験をもつ。著書に『ライオンを狩る男の冒険』(1878) など。

「狩りの十時間」

言うまでもなく、例のピアニストの友人は、ドゥランス³⁶⁾にある軽罪裁判所への出頭を命じる召喚状を受けとったときに、ひどく不愉快な驚きを味わったはずです。後日知ったところによると、アリバイを証明することができなかったのだとか。その結果、彼には16フランの罰金と、さらに同額の諸経費の支払いが課せられました。

急いで附言しておかなければなりません、しばらくしてから彼は郵便で、「返還金」という名目のもと、自分が立て替えたお金の埋め合わせになる32フランの為替を受けとっています。それが誰のところから来たものなのかを、彼が知ることはありませんでした。しかし、彼の額にはやはり軽罪犯の汚点が付いてしまったわけですし、ということはつまり、前科持ちになってしまったのです！

XII

最初に申しましたが、私は狩猟家が嫌いです。特に、狩りの武勇伝を語りたがるからです。ところが、今回は私も自分の武勇伝を語ってしまいました。ひとつご容赦いただければと思います。こんなことは、もう二度とないでしょうから。

あの遠征は、筆者にとっては最初で最後のものとなるはずですが、あれからずっと抱き続けている思い出は、恨みの気持ちにも似ています。ですから、猟銃を小脇に抱え、犬のあとを追っていく狩猟家に出くわすたびに、欠かすことなく豊猟を祈念してあげているのです——なにしろ、「そんなことをすると縁起が悪い」と言いますからね³⁷⁾！

36) ドゥランス (Doullens) はアミアンの北方約30キロの距離にある街。

37) (ある種の状況においては) 人に幸運を祈ると逆にその人に不幸をもたらしてしまう、という俗信がフランスにはある。この俗信ののっとった縁起かつぎの精神は現代でも根強く残っており、例えばこれから舞台上に上がろうとしている俳優、試験に臨もうとしている家族・友人などに対しては、幸運や成功を祈るのではなく、代わりに「Merde !」という下品な言葉をかけてやるのがよいと(一部で)考えられている。

[訳者付記]

本稿は、ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne, 1828-1905) の自伝的短篇小説「狩りの十時間 (Dix heures en chasse)」の翻訳 (本邦初訳) である。

本作品は、まず1881年12月18日にアミアン・アカデミーでの公開講演の場で著者自身によって読み上げられた (つまり、活字となる以前に口頭で発表された)。その原稿は、翌19日と20日付の「アミアン新聞」に掲載され、さらに翌年刊行の『アミアン・アカデミー紀要』³⁸⁾に収録されたあと、一定程度の改稿を経て、エツェル社の単行本『緑の光線』³⁹⁾に収められる。本稿が翻訳の底本としたのは『緑の光線』掲載版のテキストである。

改稿前後の二つのバージョンの異同についてはオリヴィエ・デュマが整理・分析しているが⁴⁰⁾、『緑の光線』掲載版では、例えば屠殺に関する残酷な表現、不倫に関する性的なほめかし、飲酒癖に関する冗談、ピカルディ地方のローカルな固有名詞などが削除されている。ヴェルヌの小説連作〈驚異の旅〉に編入されることにより、本作品の想定読者が「アミアン市民」から「全世界のヴェルヌ作品の読者 (特に青少年の読者)」へと大きく変化したことに伴う措置であろう。

翻訳に際し、東京外国語大学の小久保真理江先生にはイタリア語に関する不明点について、立教大学の石橋正孝先生にはフランス語に関する不明点について、貴重なご教示を賜った。また、資料収集にあたっては成城大学図書館レファレンスカウンターの皆様によりがたいお力添えを頂戴した。ここに記して感謝申し上げる次第である。

38) Jules Verne, « Dix heures en chasse. Simple boutade », *Mémoires de l'Académie des Sciences, des Lettres et des Arts d'Amiens*, année 1881, 3^e série, tome VIII, 1882, p. 193-218.

39) Jules Verne, « Dix heures en chasse. Simple boutade », *Le Rayon-vert suivi de Dix heures en chasse*, Paris, J. Hetzel, coll. « Bibliothèque d'éducation et de récréation », 1882, p. 271-306.

40) Olivier Dumas, « Les deux versions de « Dix heures en chasse » », *Bulletin de la Société Jules Verne*, n° 63, 1982, p. 273-277 ; Id., « Dix heures en chasse. Une histoire vécue », *Bulletin de la Société Jules Verne*, n° 149, 2004, p. 3-6.